

【読楽】027 「泰平往来」を読む \*読楽箇所＝「泰平往来」全文

「泰平往来」の概要

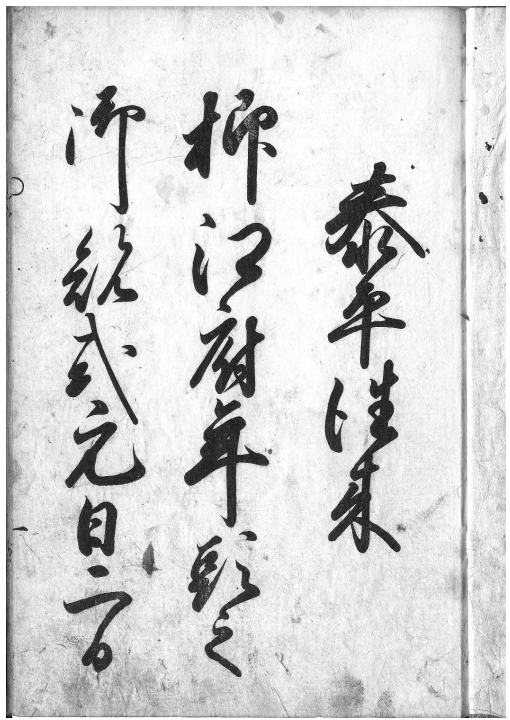
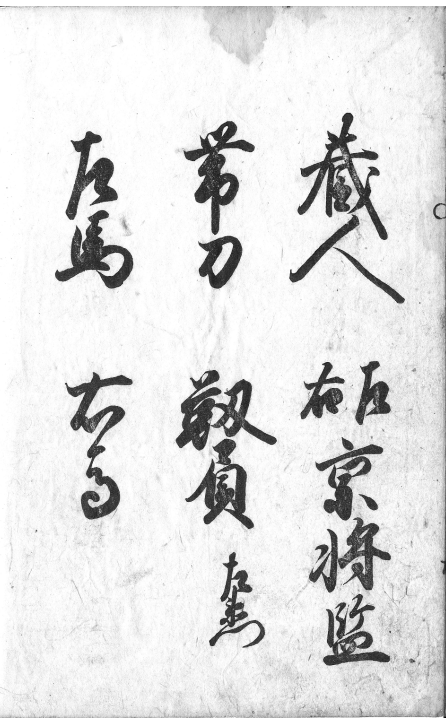
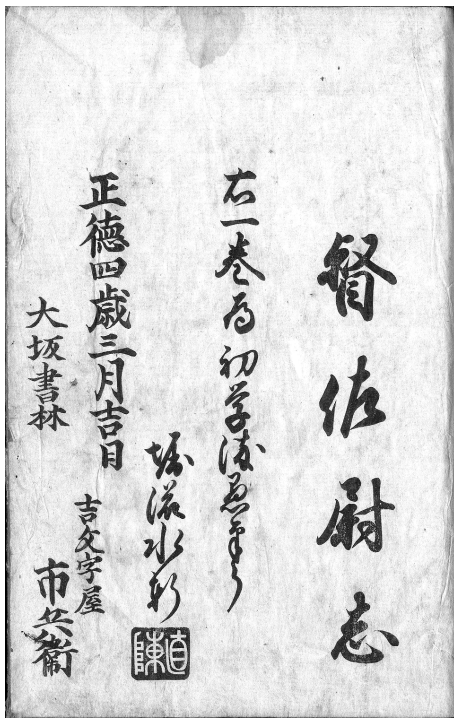
〈堀氏流水軒〉泰平往来〈国尽官名〉

【作者】堀流水軒(直陳)作・書。

【年代等】正徳4年3月刊。[大阪]吉文字屋市兵衛板。

【備考】「泰平往来」「諸国(大日本国尽)」「官名」から成る手本。「泰平往来」は、まず「抑江府年頭之御規式、元日、二日、御一門之御方々、国主、城主之歴々、三献之御祝、其外、諸侯昵近之面々…」と筆を起こして、正月朔日、2日に將軍家一門、各国諸侯以下諸役人、続いて3日に諸大名の子息以下の新年挨拶を始め、5日寛永寺僧侶の挨拶、6日諸国寺社の挨拶、7日「七種之御粽」献上、11日御具足祝いを始めとする新年儀式のあらましと城中の様子を綴り、君主を「前代未聞の名君」と讃える。後半では、まさに「国家安全、理民長久の瑞相、泰平繁昌」の今日の江戸は、日本諸国のみならず中国・朝鮮・琉球・オランダなど近隣諸外国からも崇敬されることを述べた後、江戸府内、東西南北の地名と繁栄ぶりを紹介する。このように『泰平往来』は、寛文9年(1669)刊『江戸往来』に、後の文化2年(1805)刊『御江戸名物往来』や『(江戸)繁栄往来』の要素を加味した地理科往来といえよう。「国尽」は五畿内以下の諸国名、「官名」は「太政官・左大臣・右大臣…」から「…督・佐・尉・志」までの官名・官位を列挙する。

★新年儀式の記述は、『江戸鹿子』か『国花万葉記』の模倣(後述)



## 「泰平往来」を読む

## 泰平往来

## 江戸府内の新年儀式等

抑も江戸府年頭の御規式\*1、元日・二日、御一門の御方々、国主、城主の歴々、三献\*2の御祝い、其外、諸侯昵近の面々、詰衆\*3番頭\*4・物頭\*5・諸役人・諸番の健士\*6、御流\*7頂戴、且又、大中納言・参議・中將・少將・侍従\*8、四品\*9・五位\*10の諸大夫\*11迄、美服二領\*12宛之を下し賜り、家禄の軽重と官位の浅深とに依って、或いは台、或いは広蓋\*13を以て之を拝領す。

三日は、諸大名の息子、無位無官\*14、並びに諸家中の証人\*15、及び京都・大坂・奈良・堺・伏見・淀過書\*16、銀座\*17・朱座\*18の輩迄群れ候に、落縁\*19、品々進物これを捧げ奉り、御礼申し上げ候也。同日夜に入り、御謡初\*20として、酉の刻\*21、大広間へ出御、祇候\*22（伺候）之の大小名、長袴、嘸装\*23、四座\*24の猿楽板縁\*25に群居し、御逸子（囃子）三番、所謂「老松・東北・高砂」是也。折々、小謡これを唄い、諸侯献ずる所の御盃台より銘々披露これ有る間、御酒宴なり。

\*1 定まった作法・方式。きまり。

\*2 正式な饗宴における儀礼的な酒宴の作法。肴さかなの膳を出して酒を3度進め（一献）、初献・二献・三献と膳を替えて3回繰り返す。

\*3 室町幕府、豊臣家、江戸幕府などにおける武家の職名。特に将軍、または主君に近侍し、非常時にそなえた番衆（番方）。足利義政のとき、絵番中から選んだのが始りという。江戸幕府では、雁間詰かりのまの譜代大名から選ばれ、交代でこれをつとめた。

\*4 番頭は中級藩士を束ねる上級家臣で、藩の軍事組織の長。番頭の中には、家老にまで昇進する者もいる。

\*5 物頭は、徒歩で従軍する下級武士である御徒おかしの者や鉄砲の者といった足軽クラスの下級家臣を束ねる中級家臣。

\*6 勇ましい男子。特に武勇にすぐれた者。

\*7 酒席で、敬意を表すため目上の人への飲み干した杯を受けて注いでもらう酒。もとは貴人や主君の杯に残った酒をもらった。

\*8 君主のおそばに仕える人。

\*9 第四等の位階。正四位・従四位の称。

\*10 位階の第五番目。正五位と従五位とがある。律令制では五位以上は勅授とされ、六位以下にくらべて格段に優遇された。

\*11 五位を授けられた者。また、大名の家老。

\*12 領（襲）は「くだり」と読む。助数詞。衣裳や幕・蚊帳などを数えるのに用いる。そろい。

\*13 盆の一種。引き出物、食物、衣服などを進呈したり、供したりするのに用いる長方形または正方形の、縁のある大きな盆。盆の中央に家紋を入れるのが正式。

\*14 無位・無官は、位階をもたない人と官職がない人。←→ 有位・有官

\*15 証人。ここでは、江戸時代、幕府が人質の意味をもって、江戸屋敷に居住させた大名の妻子。

\*16 「過所」とも。古代・中世の関所通過の許可証。ここでは、江戸時代、伏見・大坂間の淀川筋の往来を許可されて、客や貨物を運送した船の通行証。

\*17 江戸幕府の銀貨鑄造所。勘定奉行の管轄下にあった。慶長6年（1601）伏見に設けられ、のち駿府・京都・江戸・大坂・長崎に移転したり新設されたりしたが、その後江戸に統合された。明治2年（1869）造幣局の設置に伴い廃止。

\*18 中世から近世、朱や朱墨などの製造・販売を独占する特権をもった商人の座。

\*19 一段低くなった縁側。普通は濡れ縁（雨戸の外側などに付けられた縁側）になる。また、江戸時代、奉行所の法廷の一部。

\*20 新年になって初めて殿中で謡曲を謡う儀式。

\*21 時の数え方で、24時間を十二支に割り当てたうちの第十番目。概ね18時前後、夕暮れ時が該当する。暮六ツとも。

\*22 貴人のそば近くに居て仕えること。また、貴人の御機嫌伺いに行くこと。

\*23 嘸装は不明。「嘸」は、「鳥が羽の手入れをする」意味という。

\*24 大和猿楽四座。結崎・外山・坂戸・円満井えんまんいの四座で、のちに、それぞれ観世・宝生・金剛・金春こんばると改称。大和四座しぎ。

\*25 板を張って作った縁側。

五日は寛永寺の僧侶数十許輩、六日は近里遠境、諸寺諸山、出家・社人<sup>\*26</sup>・山臥（山伏）等、数百人充滿、その當中<sup>\*27</sup>に台顔<sup>\*28</sup>を奏拝す。

七日、七種の御糝<sup>\*29</sup>これを献ず。

十一日は、御具足御祝い、並びに連歌御興行。是、御嘉例に依るなり。

十五日、恒例の諸御礼。十七日、東叡山御参宮。廿日、同所御参堂。

二十四日、増上寺御仏詣なり。

#### 徳川将軍家の威光と余沢

誠に以て、御先祖の御崇敬、仏神の御信仰、云裕云恰<sup>\*30</sup>、前代未聞の名君、世を挙げてこれを仰ぎ知る所なり。

此の外、臨時の御祝儀連綿して断絶無く、四海浪静かにして国家安全、理民<sup>\*31</sup>長久の瑞相、泰平繁昌、此の時に候。日本六十余州は申すに及ばず、支那四百余州、奇麗、高麗・新羅・百濟・契丹・琉球・阿蘭陀・南蛮・北狄・東夷・西戎<sup>\*32</sup>迄御政道を感じ慕奉り、毎歳、商売船を長崎へ入津せしむ。

これに依り異国の美物・奇物、金欄羅綾<sup>\*33</sup>、その外、新古器財、凡そ天竺・漢土の重宝悉く本朝へ至り、運送の四大<sup>\*34</sup>日々に盛んなる事、言詞に尽くし難し。就中、★大君<sup>\*35</sup>御在城所たるに依って集めしは武府なり。

#### 江戸府内の様子(地誌的概要)

尤も、江戸の為体<sup>\*36</sup>、南北は品川より千住迄、人家軒を連ね続けて四里余り。西は又、其の昔広々たる武蔵野と為すと雖も、名に残すのみにて寸地無く、板橋・高井戸・府中辺迄五里六里の間は残らず、大小名下屋敷を構え、或いは諸物頭等の組屋鋪<sup>\*37</sup>なり。

東は、漫々たる海中に埋み、隣る下総、船の往返自由なる事、勝計<sup>\*38</sup>し難し。市谷・牛込・小日向迄内川堀続き、或いは麻布・長坂・雑色の方迄堀新川、其の間々橋なり。然して人馬の通路自在なり。町小路、豎横新道、裏店<sup>\*39</sup>等錐立<sup>\*40</sup>すべき空地無し。寔に目出度き御代の有様、千秋万々歳、穴賢々々。

\*26 神社に仕えて末端の社務に従事する神職。

\*27 将軍の居所。柳営中。

\*28 他人を敬って、その顔をいう語。尊顔。★**原本ではこの語句で改行(平出)する点に注意。**

\*29 糝(シン・こながき)は、米の粉をかきまぜて煮たてたあつもの。

\*30 とにもかくにも「裕恰」あれこれにつけて。何事につけても、何にしても。かれこれ「左右・故是・裕恰」あれこれ。

\*31 民を治めること。治民。

\*32 いずれも古代中国人が周囲の異民族を野蛮なものとしてさげすんだ名称。南蛮はインドシナを始めとする南海の諸民族。北狄は匈奴・鮮卑・韃靼など北方の異民族。東夷は東方の異民族。西戎はトルコ族・チベット族など西方の異民族。

\*33 金欄は縵子・綾などに金糸の紋様を織り込んだ豪華な織物。羅綾はうすぎぬとあやおり。また、高級な美しい衣服。

\*34 仏語。万物の構成要素とされる、地・水・火・風の四つの元素。

\*35 徳川将軍の別称(殊号)として外交文書に用いた用語。寛永12年(1635)以降、朝鮮使節が用いた。正徳元年(1711)新井白石の主張で「国王殿下」に改められたが、幕末に欧米諸国との交渉にあたりこの別称が復活。★**「大君」での改行(平出)に注意!**

\*36 ようす。ありさま。現代では、好ましくない状態やほめられない状態についていう。

\*37 江戸時代、与力・同心などの組の者にまとめて与えられていた屋敷。

\*38 一つ一つあげて数えること。とりたてて数えること。

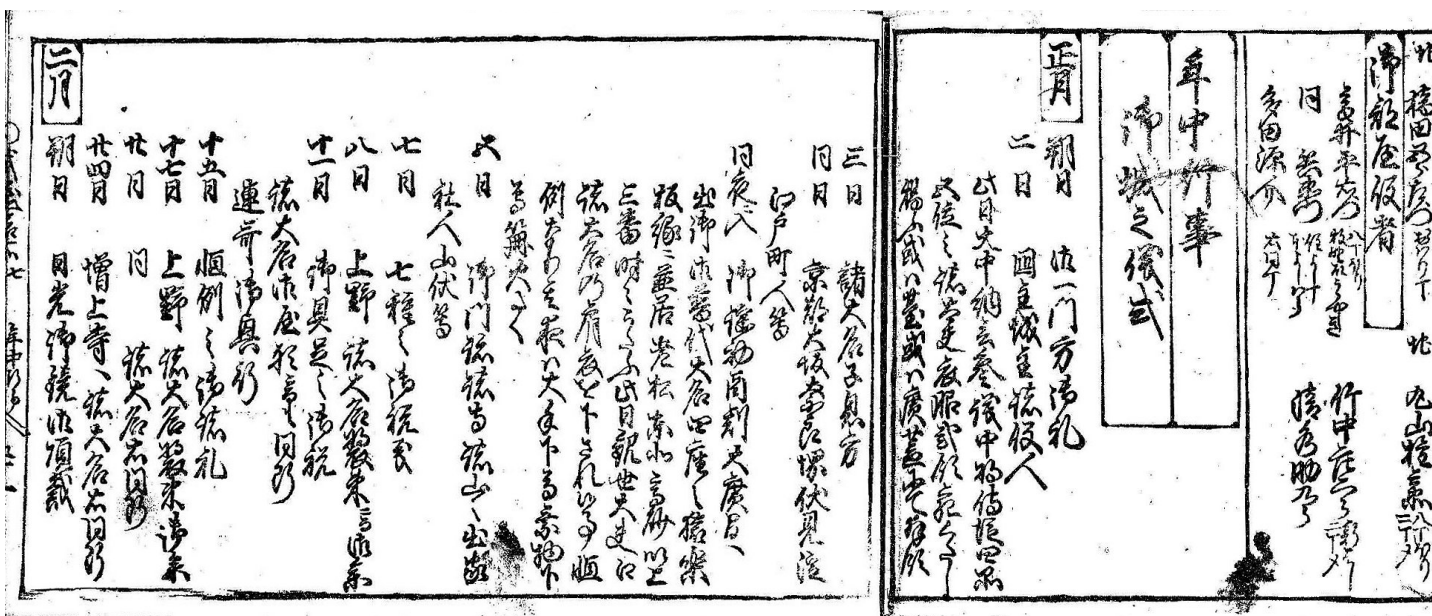
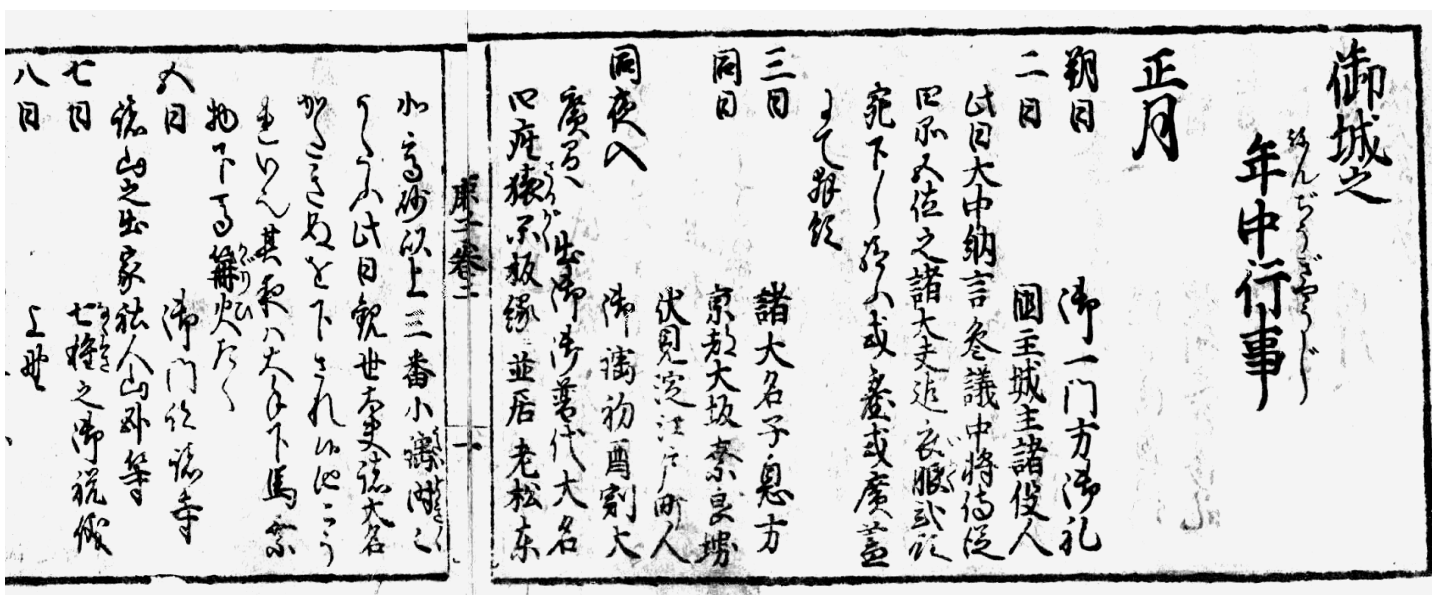
\*39 裏通りにある家。商家の裏側や路地などにある粗末な家。

\*40 「立錐」に同じ。錐を立てること。

ネタ本は『江戸鹿子』か『国花万葉記』か

江戸鹿子 * 6巻6冊 (江戸惣鹿子名所大全 * 6巻8冊)	(日本) 国花万葉記 * 全14巻21冊
藤田理兵衛編	菊本賀保編
貞享4年(1687)刊 [江戸] 小林太郎兵衛板	元禄10年(1697)刊 [大阪] 油屋与兵衛板
貞享2年(1685年)刊の京都地誌『京羽二重』に直接影響を受けて刊行された江戸の地誌。書名は、広大な武蔵野を点描するという意味で鹿の子絞りに準えたもの。『京羽二重』と同様に主題別に構成し、検索性を重視する。説明には精粗があるが、当時の商工業等の具体的な状況を知ることができる。なお戸田茂睡作、天和3年(1683年)刊『紫の一本』と類似する説明が多い。後継書として、挿絵を増補して7巻仕立てにした①松月堂立羽不角編、元禄2年(1689)刊『(入) 江戸惣鹿子』、原作者による増補版である②藤田理兵衛作、菱川師宣画、元禄3年(1690)刊『(増補) 江戸惣鹿子名所大全』、さらに、大幅な改編を加えた③奥村玉華子編、寛延4年(1751)刊『(再板増補) 江戸惣鹿子名所大全』がある(Wikipedia参照)。	『日本鹿子』に次いで出版された日本全国の地誌。別名が多く、地域によって記述の精粗が目立つ。概ね各国とも、最初に「武鑑」を掲げ、ついで神社仏閣・名所旧跡・名産を記し、特に三都では諸商諸職諸芸の人名録を付す。単なる地誌に止まらず、実用的な諸国案内書として編まれている(「日本古典文学大辞典」参照)。 ※『日本鹿子』14巻序目1巻12冊は、磯貝捨若(懸河舟也)編、石川流宣画、元禄4年刊。
★2巻「御城之年中行事」	★7巻上「年中行事御城之儀式」

●上段=元禄3年板『江戸惣鹿子名所大全』(貞享板と同内容) / 下段=元禄10年板『(日本) 国花万葉記』



# 『御江戸年中往来』にみる庶民の正月

## ●『御江戸年中往来』(冒頭部) ■は欠字(闕字)

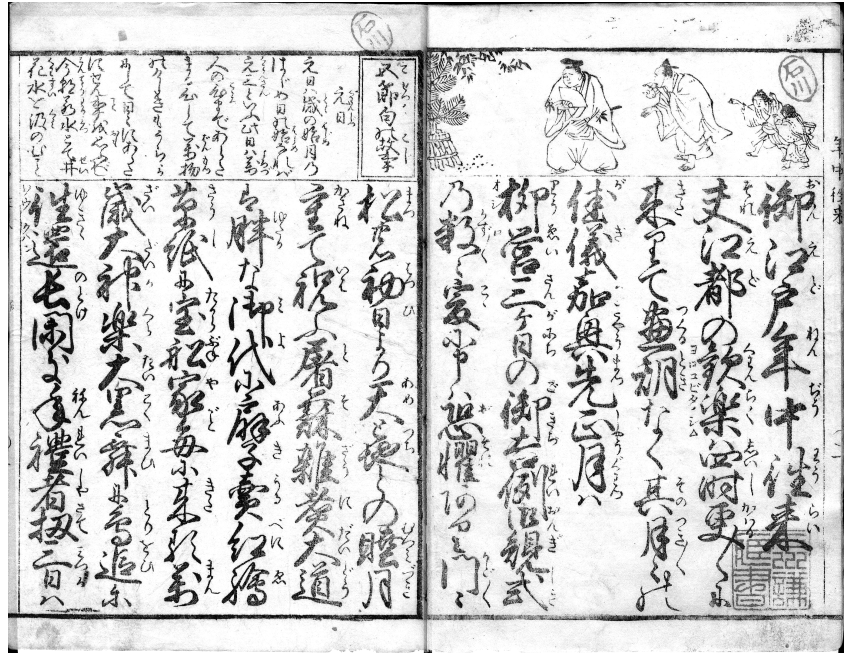
夫れ江都の歡樂は四時更わる更わるに來たりて  
て尽くる期なく、其の月々の佳儀嘉興。先ず正月は**〔平出〕**

柳堂三ヶ日の御吉例、御規式の数々爰に申すは**恐懼あり**。門々松の初日より天と地との睦月、重ねて祝う屠蘇・雑煮、大道は胖かな御代に扇子売る、紅絵草紙に宝船、家毎に來たる万歳大神楽、大黒舞に鳥追に、往還長閑き年礼者。

扱三日は上野大師参り。同じく護国院には大黒天の福わかし。五日は浅草寺三社の流鏝馬。六日は年越し門松納め。七日は七種齋 粥に爪取り始め。十一日は東叡山御仏 ■御成。続いて御大小名御参詣、鏡開きに蔵披き、帳綴じ祝い十四日、又年越しなり。十五日は小豆粥、十六日は齋日とて閻魔参り。芝浅草の山門開き。此の日小

者の數入りや、寺参り廟参するとかや。十八日は上野大師に観音参り。浅草寺法花三昧会。二十日は芝増上寺御仏 ■参なり。若夷講此の日にて、二十五日は初天神、又、浄土の元祖円光大師の御忌参り。二十八日は目黒其の外不動詣りなり。

此の月初卯は亀戸妙儀、初寅は処々毘沙門参り。毎月十日は金比羅、又、矢口新田参り。午の日は王子稻荷へ参る也。



## ★『泰平往来』との違いは？

■江戸城年始登城風景図屏風(佐竹永湖画、明治31年、江戸東京博物館蔵 \* 西 丸大手門~坂下門~桔梗門~大手門)



\* 江戸城の諸侯登城は江戸の一大イベント。將軍への新年挨拶で、大名たちは午前7時頃に江戸屋敷から大名行列で登城した。大名の格式によって拝賀の礼の日が定められ、正月三が日続いた。現在の皇居前広場には諸国大名の家来が終日待機したため、沢山の出店や見物客で賑わった。